

来住 真太さん

Shinta Raiju

NPO法人らふと事務局長

StudioGOOは2012年の今年で10年目をむかえました。営利を目的とせず、今までささやかに運営して来ましたが、これから5年後10年後を考えた時に、住宅街にあるこのスタジオがどうあるべきなのか。今一度問い直してみたいと思いました。

そこで、オルタナティブスペースを運営している方々にそれぞれのお考えを伺いたいとインタビューを試みることにしました。



NPO法人らふとが運営をしているRAFTは東中野と中野坂上の中間地点にある、約2間半×4間のこじんまりとしたオルタナティブスペースです。2006年1月にオープンして今年で7年目をむかえます。40人も入ると一杯のこのスペースで、ダンス、演劇、伝統芸能や、子どもの為のワークショップなどが精力的に行われています。アットホームでかつ先鋭的なこのスペースの活動に、小スペースの在り方を考えるヒントがあるように感じ、RAFTの事務局長で実質RAFTのすべてを運営している来住真太さんにインタビューをさせていただきました。

(インタビュー:StudioGOO 吉福 敦子)

地域にいろいろな人が集まる場所を作りたい

—まず、RAFTさんがスタートした経緯をお話いただけますか。
来住 (以下、来) 僕の親と周りの仲間が、地域にいろいろな人が集まる場所を作りたいと考えていて、そのグループがディナーショウや、ミュージシャンを呼んできてカフェでコンサートをやったり、公民館で劇団を招いて公演をしたりと、企画をしていたんです。彼らは仕事とは関係なく楽しいからやっていました。

その企画はある程度一段落していたのですが、また何かやりたい。1回きりでなく、継続的に人が集まる様なことができればいいなと思いたしたらしく、それで、彼らなりにいろいろリサーチのために、京都芸術センターや大阪のロクソドンタなどに行ったりしていました。

その頃、僕が演劇の舞台美術の手伝いをしていたのもあって、ちょっとずつ彼らの相談にのっていました。場所が決まり、運営していくのに誰か常勤がいなきゃ、ということになって、フリーターの様な立場だったので「真太くん、いいんじゃない」となりました。

僕も興味があったので、引き受けたわけです。

—失礼ですがご両親やそのお仲間はおいくつぐらいですか？

来 当時だいたい60歳手前くらいですね。出資しているメンバーが3人いるのですが、ちょうど定年退職で、それを機に退職金を少しずつ持ち寄って元手にしました。

—みなさんパワフルですね。

来 本当は自分たちで運営をと思っていたらしいのですが、いろいろ見学して自分たちには手に負えない、それならそうしたことを分かっている人が良いということで、僕が頼まれることになりました。

—理事の方はどんなかたちで参画しているのですか？

来 2週間に1回、運営会議があります。企画自体は大部分僕がたてるのですが、それについて話をしたり、財政状況報告やこれからの方針を、みんなで意見を言って決めていきます。

—理事の方は企画を観にいらしてますか？

来 はい。ちよくちよく観に来ています。企画によっては主体的にやってもらったり、ドリンクを用意してもらったりしています。

地域の中に入っていく

—RAFTさんの特徴は「地域社会に芸術文化を広く浸透させる」「アーティストと市民が交流できる場の提供」と、「地域社会」に目をむけているとこだと思います。そうした活動の具体的なところをお話いただけますか？その中には「いかだ亭」と「親子のあそびのじかん」の企画がありますよね。

来 はい。「いかだ亭」は演芸の企画です。「いかだ亭」を開催する以前から単発企画として落語や浪曲など伝統芸能的なもの

のをやっていたのですが、「いかだ亭」として始めたのはここ1年くらいです。実際、この企画を担当しているのは、RAFTのもうひとりのスタッフの伊藤です。伊藤には、一年前からRAFTでスタッフとして働いてもらっていて、彼女自身、演芸的なものが好きだったので、この分野の企画を担当してもらっています。

—「落語」の企画を見た時に、あ、ここは普通の劇場とちがう、って思いました。

来 あはは。そうですね。やはり、地域の人を考えた時に、演劇、ダンスだととっつきにくいというか、落語や浪曲のほうがより足を運びやすいかなって。そこで企画として取組んでいきたいなと思いました。

—もうひとつの「親子のあそびのじかん」は？

来 乳児から2歳くらいが多いかな、保育園に行く前の子どもたちがきています。

—なんと乳児から幼児なんですね。おそろしい企画ですねえ(笑)

来 あはは。

—毎回定員が一杯になっていますよね。

来 そうなんです。

—「いかだ亭」や「親子のあそびのじかん」は近くの方がいらしているのですか？

来 そうですね。「いかだ亭」に関しては地域に浸透しているとはまだ言いたいのですが、ウチの企画の中では比較的多いかな。「親子のあそびのじかん」は本当に地域の人たちが中心で、告知したものがこれだけ反響として返ってくる企画はないなって感じます。地域の需要があるんだな、って実感します。

—どういうプロセスでここまでできたのですか？

来 RAFTとしては「地域に根づいた活動」を掲げているのですが、まだ模索中です。模索のひとつとして伝統芸能的企画をやったり、親子企画をやったりしています。まだ手応えはなかなか感じられないのですが、もう少し続けていこうと思っています。

今度、「いかだ亭」に関しては中野区が出している地域の広報誌に広告を載せることになっています。それが地域の方の集客につながるか、様子を見てみようと思っています。

子どもを対象とした企画ということでは「親子のあそびのじかん」を企画する以前に「こどもと演劇」というのをやりました。その時は中野区から後援をもらって、児童館や地域の保育園をまわってチラシを配ったりしました。それと、中野区の掲示板が道々にあるんですが、それを子育てしている方は案外見ているんだってわかったんです。その掲示板の情報を見て、足を運んでくれる方々が結構いました。その他には、パン屋さんにチラシを貼らせてもらったりなど、近所のお店に置いてもらったりして地道に告知をし、そういったことが集客につながっていきました。「あーこういう企画って求められているのだな」って思いまし

た。ただ、演劇だと準備や仕込みが結構大変で、「こどもと演劇」の開催は1年に1回だったので、もっと継続的に、気軽に来られる様な企画にしたら、さらに地域の人が来てくれるんじゃないかなって。それで「親子のあそびのじかん」という絵本の読み聞かせや音楽をミックスした企画を始めることになりました。本当にそれは思った以上に反響があって、「あ〜、この企画は届いたな」ってそんな感じです。「充実した企画になったなあ」と思える企画全般に言えるんですけど、僕が提案した企画を具体化する際に、参加してくれる方々（俳優、ダンサー、演出家、ミュージシャンなど）が、自らいろいろアイデアを出してくれるんです。そうすると、当初考えていた内容の何倍も充実したものになるんです。この親子の企画もそんな企画の一つでした。

—低年齢層というところに需要があったのでしょうか？

来 そうなんです。小さい子たちはどこにいるのかな、って思って児童館に行ったら、お母さんと子どもがいっぱいいたんです。みんな子どもと一緒にいられる場所を探しているんですよね。その選択肢が増えることはいいことなんだろうと。それでお母さんたちの気持ちと合うものなら来てくれるんですよ。こういった親子の企画や演芸企画に来てくれる方々がダンスや演劇の観客にもなってくれる、そんな流れができるのが理想です。

人の評価を気にしないでやれる場所でありたい

—他の企画では、若手育成の「ダンスネスト」や新しい創造の形を紹介していく「名づけることのできない仕事」など、既に評価の定まったものでなく、模索していくものを提案していますね。

来 「場」を持たないと、いろいろ考えても始まらなかったり、「若手」が場を与えられるのは大事なことかなって思います。挑戦してもらって使ってもらえるとRAFTにとってもいいのかな、と。

自主公演として大きな劇場でやると、「失敗できない」と思う気持ちがどこかで働くと思うのですが、RAFTはやってみたいことを自由に試行できる場、人の評価を気にしないで表現出来る場でありたいなと思います。そうやって思い切って自分のやりたいことをやった方が面白いことができるんじゃないかなって思うんです。さまざまな表現のなかに、「完成はしていないけれど完成していないところに面白さがある」という場合があると思っています。RAFTの空間も完璧な空間ではないので、そうした意味でもこういう方向が合っているなって。

—RAFTさんの面白いところは、「RAFTのお客様」がいらっしゃることですよね。

来 はい。まあ、少ないんですけどね(笑)。そういったお客さんは、RAFTに関わったこともあり、公演を観に来てくれているので、「RAFTでなければ絶対一生観ないようなダンスが観られた」と言ってもらえると、よかったなって。まあ、これは課題で、もっとそうした人が増えないといけないと思うんです。

観る側とやる側がフラットな関係で 交流しあえる関係を

—RAFTさんの宣言でもうひとつ「アーティストと市民が交流できる場」とありますよね？

来 はい。ただ観るだけでなく、観る側とやる側がフラットな関係で交流しあえる関係をこの場でできたらいいなと。もうちょっとキャパが大きくなると難しくなっちゃうけれど、この空間だからこそ、それが可能だと思っています。ただ実際に工夫をしていることというと、打ち上げをやったり、そこにお客様でも残れる人は残ってもらおうとかそれぐらいの事なんです。

前にダンサーのノシロオオコさんとソウルのアートイベントに参加したんですよ。そこでいろいろな方たちを紹介してもらったり、アーティストの家に泊めてもらったりとかして、すごく彼らがフレンドリーで。そこでの体験というのが大きくて。イベントが終わった後にお客さんとやっている側が本当にフラットに楽しんでいるんですよ。「あー、こういう雰囲気いいなあ」と思いました。

その時の韓国のアーティストたちは僕たちを気持ちよく受け入れてくれて、何をしてもいいのですが「存在」を認めてくれるっていうか。なんか無理にちゃんと用意しなきゃいけないというのではなく、「来たい」という人を気持ちよく受け入れれば成立しちゃうんだなって。「こういう感じでやればいいんだ。うちもこういう感じで」って。そうしたことを教えてもらいました。

—RAFTさんでは企画が終わった後にさりげなく乾杯しますよね。それはそのソウルのアートイベントの影響なんですか。

来 そうですね。食べ物とかちょっとあると、自然と関係が生まれますよね。やる側の人たちもそういうのがあるといいかなって。全部に目が届くこの大きさだからこそできるのかなって思います。

今、みんなで考えてみる必要性

—新企画として、何かあたためているものはありますか？

来 パフォーマンスフェスティバルをやりたいと思っています。ある程度社会的なテーマを持って上演活動をしているパフォーマンス者をお願いをして、今の日本、現代を問う企画をやりたいです。—この企画を考えたいきっかけは何かあるのですか？

来 もとから社会、現実におこっていること、日常をおびやかすことを意識していきたいというのは考えていて、ただ企画として取り上げるのはどうかという思いがあって直接企画のテーマにはしてこなかったのですが、今の状況を見てみると、そうしたことを前面に押し出してみんなで考えてみることも必要じゃないかと。

■ RAFT

東京都中野区中野 1-4-4 <http://raftweb.info>

「RAFT=らふと」とは、川を渡ったり海を越えたりする「いかだ」のこと。「文化・芸術」は、さまざまな違いを越え、人々のなかに幸せや喜びを呼び起こす力を持っています。そのような「文化・芸術」を、多くの方々と一緒につくり、育てていきたいという考えのもと、2006年1月にオープン。

—すぐにこう何でも結びつけるのははばかれるのですが、それは去年の311を経てということもあるのですか？

来 まあ、それも大きなことですね。ただ、今考えているのは原発とか311にからんだことだけをやってもらいたい、ということではなく、社会的なテーマを企画として打ち出したいということです。なんだか、観る側も創る側も、たぶん311以降変わった部分があると思うんです。実際僕もそうだったので。作品の観え方や感じ方に変化があったんです。そこで、実際そうしたいろいろなテーマを打ちだした作品を観た時に、それらから感じる「切実さ」みたいなものの受け取り方に違いが出てきているように思います。僕は、さまざまなアートには現実を間接的に変える力があると思っています。直接でなく間接的ということにアートの面白さと意味があるかなあと。この企画もそういう思いから出てきた企画です。

—その企画は楽しみですね。この大きさのRAFTさんでやることに意義があるな、と思います。まず身近に感じられますし、こうした企画は賛否がでてくると思うので、終わった後の「RAFTスタイル」で、それら両方を互いにしっかりと受け止めて、フェスティバルができるんじゃないかと思います。

来 良いものなるといいですけど。これからも充実した企画をRAFTから発信していきたいと思っています。

—楽しみにしています。今日は長い時間有り難うございました。

来 いえいえ (2012年9月20日 RAFT3階事務所にて)

■インタビューを終えて

「地域にいろいろな人が集まれる場をつくりたい」という思いからスタートしたRAFT。熱意に貫かれて活動が続けられ、小さなことをひとつひとつ地道に積み上げ、日々柔軟に変化と進化を続けています。「RAFTスタイル」とも言える小さいからこそできる観客と創る側のフラットな関係は、大いに学ばれます。現状に甘んじることなく常に先鋭的であろうとするRAFTが発信するアートが、地域のまた東京での鋭い楔になっていくのではと思いました。

